

歴史・文化サイトカード

通しNo.		1-B-2		更新日	2025/1/31
サイト名		いにしえしおどめ 古の汐留と豊作祈願～塩楯島 しおだてじま			
基本情報	区分	☐ 有形 ☐ 無形 ☒ その他			
	所在地	松江市竹矢町			
	指定別				
	種別				
	指定／登録年月日				
	管理団体／モニタリング				
	周辺施設／アクセス	☐ トイレ ☐ 売店 ☐ 飲食店 ☐ 駐車場(台)			
	留意点				
サイトの解説	歴史・文化	塩楯島の名前は、『出雲国風土記』にも塩楯嶋と記載されており、1,300年間同じ名前の島である。由来について、中海から宍道湖への海水の上昇を妨げる役目をしていると考えたからではないとも言われている。風土記には、蓼螺子(たでにし)、水蓼(みずたで)があると伝えている。 島には鳥居があって、その後方の石段を上がると手間天神社(てまてんしんしゃ)がある。この手間天神の根元社について、『神道大事典』には、出雲国と伯耆国との境に入海があり、そこに小島があり、手間天神と号して少彦名命を祀る神社がある。命はその祖神の指間から漏落ち給うたと伝えられ、その義に因んでついた社名である。「然るに世にこれを天満天神とも呼ぶもののあるのは誤りであるといふ」とある。『雲陽誌』も同様の由来を伝えている。			
	地形・地質、生物・生態等	塩楯島は、幅が30数m高さが6mほどの円形の島である。アルカリ玄武岩～粗面安山岩の溶岩を伴った火山砕屑岩の露頭がノッチ状を呈して島の西側にみられる。最近の研究では、それらはおよそ1,200万年前の火山噴火によってできた地層とされる。古くから塩楯島周辺は「手間の関」とよばれ、中海からの塩水の逆流が起こる場所であった。江戸時代の地誌である雲陽誌によると、毎年この辺りにイカが集まり漁師がこれを網で捕まえたという。手間天神社があり、島全体が照葉樹林で覆われている。 大橋川の下流部にあたる多賀神社から塩楯島にかけては、南北方向から山地が迫り狭窄部(きょうさくぶ)をなしている。古くより矢田地区は島根半島と本土をつなぐ「矢田の渡し」の場所として利用されてきた。しかし、水深が浅く、河床には岩盤(玄武岩と考えられる)が露出していたため、明治・大正年間の大橋川を經由する船の大型化に伴い、通行に支障が生じていた。また、古くからの宍道湖の洪水対策もあり、国の直轄事業として、昭和の初めに大橋川の浚渫工事行われた。70トンの砕岩船を使って、楔を付けた径35cmの鉄棒を落下させて岩盤を砕いたとされ、4年をかけた浚渫は難工事であったと伝わる。			
写真・図等					
		塩楯島の手間天神社		中海大橋から大橋川中の塩楯島	
参考文献					